

論文題目：重訳の再評価の試みーベトナムにおける日本文学の重訳を中心にー

英文題目：An attempt to reconceptualize Indirect Translation - With a focus on the translation of Japanese literature in Vietnam-

提出者：NGUYEN THANH TAM

授与機関：神戸大学

取得学位の名称：博士（国際文化学）

学位取得の方法：課程

取得年月日：2016年3月25日

Abstract

It is through translation (direct and indirect) that works from the classics to modern literature have made their way beyond the borders of their homelands and are now read in all corners of the world. While some admit the meritorious achievements of translation, others suggest that translation is just a "poor copy" of the original text. And further, *Indirect Translation (ITr- or Relay translation)*- translation through intermediary texts of the original- is only "its further inferior copy". As a result, ITr has not been accepted, as yet, in academic circles. If such negative claims were true, it would mean that. However, it is clear that is not always possible for literary works to be read in their original form, or if translated, then only directly translated from original texts, and such narrow thinking is not feasible nor advantageous to cultural-literary exchanges and the spread of ideas going forward. In order to expand our academic knowledge and come to grips with the practical and useful translation methods that are out there, it is necessary to go beyond conventional wisdom and re-discover the phenomenon of ITr from a new angle.

In addition, it is impossible to consider the history of translation without ITr. Perhaps because of this, in recent years, ITr has caught the attention of researchers in Translation Studies. ITr has been able to perform necessary cultural and literary exchanges, even between countries which have complex relationships such as Vietnam and Japan. Sharing a border with China, Vietnam has had a 1000-year-long history of being influenced by Chinese culture, and this was followed by a 90-year period of influence by French culture under colonial rule. After winning wars against France and the US to gain independence, Vietnam continued on its path as a Socialist nation. This history of foreign influence and sudden change has had a strong impact on the history of introducing and translating foreign literature in Vietnam. In its history, the relationship between Vietnam and Japan has been interrupted several times and had many ups-and-downs. Consequently, almost all Japanese literature in Vietnam has been relayed using different mediating languages in each era, due to the influence of political and ideological

factors of the time. Before the 1990s, approximately 90% of the Japanese literature translated into Vietnamese was indirectly translated via other languages such as English or Russian. Therefore, it is clear that ITr has played a very important role in the history of Japanese literature in Vietnam. Thus, we are able to say that although ITr has negative aspects, it is also an effective means to understand and convey different cultural concepts. It appears that ITr needs to be more objectively and fully reevaluated.

In this doctoral thesis, in order to elucidate the phenomenon of ITr, we will discuss the ITr of Japanese literature in Vietnam as a typical case to study the features of translation and ITr in its relation to a historical background. We first review previous research to consolidate the definitions and terminology of ITr. In addition, we examine the basis of both negative and positive opinions of ITr in literature to assess their validity to ITr and argue that ITr can be beneficial in translating literature. In order to grasp the phenomenon of ITr, we applied the Poly-system theory (Even-Zohar, 1990) which considers vast systems of historical and social constraints from a broader context. In particular, using Poly-system theory, we consider the impact that Vietnam's historical background and social constraints have had on the growth of Japanese literature in Vietnamese translation history. Based on this, we divide the history of ITr in Vietnam into four main phases: 1913 - 1944, 1945 - 1974, 1975 - 2001 and 2002 - present. Then we identify the historical and social situations and the literary genres which were translated at each phase.

We investigate the nature of translation and ITr, based on the facts of Japanese literature in Vietnam and also from the point of view of cross-cultural understanding. When translating, translation strategies change depending on whether translators take a standpoint that belongs to the culture of Source Text (ST) or Target Text (TT). In addition, by focusing on the relationship of three points-of-view: ST, Mediating Text (MT) and TT, we were able to propose a new classification methodology of ITr which includes: 2-points-of-view ITr, 3-points-of-view ITr, as well as introduce a new model of 3-points-of-view source-based translation. This 3-points-of-view source-based translation is a method that takes advantage of ITr, and uses the reference points of ST and MT to contrast cultures and languages to TT making up the three perspectives. Thanks to this process, the quality of the TT is improved, and 3-points-of-view source-based translation is found to be preferable to other types of ITr. By analyzing examples of Japanese literature translated into Vietnamese, we confirm that the main problems of (normal) ITr are translation leakage and mistranslation when expressing cultural elements, caused by a misunderstanding in the interpreting of the ST's culture. We show that the 3-points-of-view source-based translation method is effective in solving these problems. However, low awareness of ITr, and the fact that translation rights and copyright regarding it remains undefined acts as a barrier that prevents the wider application of 3-points-of-view source-based translation. It is our hope that future research will uncover the potential latent in ITr, and find ways to popularize this new model of ITr.

和文要旨

翻訳史を辿ると、重訳、すなわち媒介言語を経由した翻訳が頻繁になされたことが分かる。聖書や科学知識の書籍から古典文学にまで幅広く重訳されて、離れている国々・文化にまで伝えられた。重訳は直接翻訳に比べてレベルが低いと考えられて、研究の対象にされたことはまだ稀である (St.André, 2009)。また、グローバル化が進んだ現在でも重訳の存在は消えるどころか、その現代的意義が増しているとさえ言える。従って、「重訳」という現象に新しい角度から光を当てることにより、新しい学術のみならず翻訳の実用に役に立つ発見につながるだろう。

重訳 (Indirect Translation/Relay) が行われる背景には、起点テキスト (Source Text- ST) と目標テキスト (Target Text- TT) の関係のみならず、起点言語 (Source Language- SL) の文化と目標言語 (Target Language- TL) の文化の交流、そして目標社会の歴史的背景や文化的・政治的な要素までも絡んでいる。重訳を通じて、かつてのベトナムと日本のような複雑な関係にあった国家間でも、文化・文学交流が確実に行えるようになった。ベトナムは中国文化に千年あまり強い影響を受けてきており、19世紀から20世紀前半のフランスによる植民地化の時期を経て、対仏・対米の戦争により独立を得て、現在は社会主義のもとで改革開放の政策を進めている。こうした変動の多い歴史的背景によって、ベトナム・日本の交流関係には妨げが多く、何度か中断されたため、日本文学の翻訳が20世紀の初頭に始まったとは言え、実態は時代により不安定で大きく変化してきた。それにつれ、ベトナムにおける日本文学は、時代ごとに異なる媒介言語を用いて重訳され、政治や思想の影響で翻訳する作品に偏りが出るといった、非常に特殊な展開を示している。1990年代までのベトナムには、訳された日本文学のほぼ9割が英語やロシア語などを介した重訳であったことは歴史的事実であり、重訳が大変重要な役割を演じていたことは明らかである。このように、重訳は否定的側面だけではなく、異文化を伝える上で有効な手段として、より客観的に再評価することが必要であると思われる。そこで本博士論文では、重訳という現象を解明するために、ベトナムにおける日本文学の重訳のケースを、歴史的経緯と関連づけ、時代背景に応じて日本文学の翻訳・重訳の役割・変動を論述することとする。

本博士論文は第1章の序論と第8章の結論を除き、各章の内容は以下の通りである。**第2章「文学の重訳：評価と用語」**においては、重訳に関する基本的な概念を整理し、先行研究で解決できていない理論的課題を明らかにする。主な先行研究における、重訳の定義、専門用語と分類を整理し、確認する。文学の重訳に対する評価では、読者の印象、出版社の対応、及び先行研究に見る評価を検討する。その中で、重訳に対して多く存在する否定的な言説を述べ、それに対する反論として、世界の文化・文学の交流史において行われてきた重訳の歴史、その役割を明確にする。

第3章「ベトナムにおける日本文学の翻訳と重訳—ポリシステム理論の観点から」では、

まず「ポリシステム理論（多元システム理論）」を紹介する。その理論の観点から、ベトナムの文学翻訳史及び日本文学の翻訳史を整理することを試みる。ポリシステム理論を使うことで、ベトナムの文学翻訳の歴史を概括し、ベトナムの特殊な歴史・社会・文学的背景と翻訳の特徴の関連を検討する。ベトナムの文学システム全体の中での外国翻訳文学の位置付け、そして外国翻訳文学システムにおける、英文学やフランス文学のような主流の文学と比較した、日本文学翻訳の位置付けを明確化させる。次に、その位置づけからベトナムにおける日本文学の特徴を考察する。それに加えて、日本文学の翻訳に影響を与えた日本文学の研究・教育の状況を検討する。

第4章「ベトナムにおける日本文学の重訳の変遷」においては、先行研究を踏まえ、ベトナムの歴史や日本・ベトナムの外交関係の経過に沿って、日本文学の翻訳史を4つの時期に区分し、歴史的な変遷を整理する。それは1913年～1944年、1945年～1974年、1975年～2001年、及び2002年～2012年現在という段階である。各段階での歴史的背景及び日本文学の翻訳事情を明らかにする。詳しくは日本文学の紹介に影響を及ぼした歴史的な出来事を整理し、その時期にどのような作品・文学ジャンルが訳されたか、またどのような翻訳法と媒介言語が使用されたかを見ていく。その中で、日本文学の翻訳において、重訳の果たした役割と時代ごとの変遷を中心に論述する。

第5章「異文化対照法としての重訳の可能性」においては、ベトナムにおける日本文学の重訳という具体的なケースを通じて、重訳の諸相を究明する。まず異文化理解の視点から翻訳と重訳のプロセスを分析する。そのプロセスにおいて原文・媒介翻訳・重訳という三視点の關係に着目し、重訳の新しい分類を試みる。通常为重訳に加え、複数の媒介翻訳を利用する重訳、さらにSTを参照する重訳等のタイプを区別する。そこに関与する視点から、それぞれの優劣を論述する。また、重訳の要素を活用する翻訳法である三視点对照の翻訳法概念を導入し、その翻訳モデルの有効性についての考察を行う。

第6章「ベトナムにおける日本文学の重訳の事例分析」においては、まず日本文学のベトナム語重訳版の具体例を通じて、重訳における問題点を考察する。重訳の場合は、異文化・言語的要素の変換過程において、直接翻訳の誤訳等から引き継がれる問題、媒介言語の差異による問題（固有名詞の表記の不統一）、及び時代的制約による問題（文化的概念の翻訳の不正確さ）という3つの課題に分けて、事例を分析し、各々問題の克服の方法を検討する。そこで、既存の重訳とこれからの重訳の質を向上させるために、三視点对照の翻訳法の有効性を再検討する。実際に行われた三視点对照の日本文学のベトナム語訳の例を、通常为重訳と直接翻訳版と比較分析しながら、三視点对照の翻訳法の利点を例証する。それは誤訳を制限できる効果、文化的に妥当な訳を導く効果、及び文学的創造の可能性という効果である。

第7章「重訳の再概念化と今後の展望」においては、それまでの考察を踏まえ、文学の重訳の本質を反映する新しい概念を確定する。そして今後の重訳・翻訳のあるべき形式に関して、重訳及び三視点对照の翻訳法の有効性を検討する。その中で、翻訳者の選択要素及び重訳の展開に有効な言語の組み合わせという2つの角度で言及する。また、先行研究で触れてきた世界言語の相関体系を分析し、重訳において、最も頻繁に使われる言語の組み合わせの傾向を明らかにする。最後に、重訳の情報が実務上公開できない現

状から、著作権・翻訳権に存在している問題点を取り上げ、考察する。

結論として、文学における重訳という翻訳方法について以下の5点にまとめる。

第一に、重訳についての先行研究を整理し、存在している理論・実践的問題点を確認した。翻訳研究では、重訳についての定義・用語と分類は間接的に翻訳するという特徴を中心になされたものであり、文化的側面からの研究がなされていないことを明らかにした。したがって、新しい観点から重訳を再認識することが必要となった。

第二に、重訳の典型的なケースであるベトナムにおける日本文学翻訳の社会・文化的背景を究明した。ポリシステム理論を援用することで、ベトナムの文学システムにおいて、植民地や戦争という複雑な政治・社会・文化的背景の下で、翻訳文学は、長期にわたり中心的ジャンルであり続けた。さらに、ベトナムの文学史では、時期ごとに中国の文化・文学、フランスの文化・文学、ロシアの文化・文学の影響力が強く、翻訳文学が主流になったことが分かった。したがって、日本文学は周辺的位置にあり、翻訳規範及び媒介言語に関してはそれらの中心的文学に影響されてきた。このように、ベトナムにおける日本文学の重訳を通して、重訳はある国の文学では、直接関係・交流がない他の国との文学・文化交流の初期に、一定の役割を果たすことが分かった。また、その国の外国文学システムにおいて、重訳は周辺文学の翻訳で多発する現象であることが明らかになった。一般的に、重訳の媒介言語は文学システムに中心位置を占める中心文学の言語である。

第三に、重訳の理論を展開するために、ベトナムにおける日本文学の重訳という具体的なケースを取り上げ、分析した。その結果、重訳を異文化理解の手段として認めることができた。さらに、ベトナムにおける日本文学の経過を辿って、それに原文・媒介翻訳・重訳という三視点の関係に着目し、文化理解への有効性という観点から、重訳の形式の展開・特徴が確認できた。詳しくは TL 文化と参照点の関係に基づき重訳の分類を検討したところ、二視点の重訳、三視点の重訳及び三視点对照の重訳という三種の分類が確認できた。また、直接翻訳と通常重訳の隣接形式として三視点对照の翻訳も確認できた。ここで、三視点对照の重訳と三視点对照の翻訳を三視点对照の翻訳法と名づけた。異文化を解釈して表現する時の誤解や訳漏れ・誤訳を改善する上で、三視点对照の翻訳法が有用なモデルとして推奨できると提案した。

第四に、日本文学のベトナム語重訳版の具体例を通じて、重訳の作業における異文化・言語的要素の変換の問題点、そして三視点对照の翻訳法のメリットを確認した。日本文学のベトナム語訳の事例分析で検証することにより、ST と媒介翻訳という二つの参照点があるため、最終的な TT の質がかなり補正できることが分かり、他の種類の重訳より優越することを示した。

特に、重訳を活用する三視点对照の翻訳法は ST、MT と TT の文化間の相互理解に役

に立つことを明らかにした。三視点对照の翻訳法によって、TT はより客観的で中立的に翻訳され、偏りによる誤訳・訳漏れを修正する効果が確認された。それに加え、翻訳者にも創造の余地を与えるという、重訳の有益な側面が新たに見られたと考える。

第五に、ベトナムの日本文学の重訳史に、小国の言語・文化の成り立ち・展開の過程と共通する特徴があるとし、三視点对照の重訳・翻訳の可能性を明確化した。文学重訳の今後の動向を見る際に、重訳と重訳の「改善版」である三視点对照翻訳法について、実行される可能性が高い形式を検討した。また、重訳と三視点对照の翻訳法を運用するに当たって、著作権・翻訳権の現状及び、残る問題点を確認した。

一方、グローバル化時代ならではの現象として、多言語で創作する作家が存在している。彼らの創作過程はある意味で重訳を行うものだと言える。例えば日本人の作家の多和田葉子¹は、ドイツ語で小説を書いて、その後同タイトルの日本語版を書く過程は、潜在的に重訳していると思われる。このような見方は重訳の拡大概念として、自己翻訳との近隣部分は出ており、これも非常に興味深い研究の展開方向である。このように、重訳という研究テーマはまだ豊かな可能性と発展性を秘めていることを改めて確信する。

¹ 1960 年生まれ、日本の小説家・詩人である。日本語とドイツ語で 2 ヶ国語の作品を創作し、芥川龍之介賞等文学賞を受賞した。